戦士

第３号

「戦士」編集委員会

● 階級闘争－党派闘争の暴力的展開について　1
　1．階級闘争と党派闘争の相互関係
　2．階級闘争・党派闘争の暴力的展開について

● 中核派の武装闘争について　5

階級闘争 ― 党派闘争の暴力的展開について

83年三里塚分裂、85年10・20戦闘、また87年全民労連発足等に象徴される政治的流動の中で、再び党派闘争の暴力的展開が激化してきている。このことは、階級闘争の発展は、不断に党派闘争へと煮詰まっていくこと、階級闘争の高揚を切り開いていくためには、真に革命的な党派闘争をやり抜き、プロレタリアートの前衛部分の結集と強化を克ち取っていかなければならないこと、を示している。我々は、この任務にもっと意識的にならなくてはならない。

党派闘争が不毛なものになっているとすれば、それは、それだけ階級闘争が混迷を深めているということを意味する。階級闘争の逢着問題への回答の地平に立って、「党に力と生命力をあたえる」（レーニン『なにをなすべきか』冒頭）ような党派闘争をこそ促進していくべく、我々は、我々の活動を強化していく。

1．階級闘争と党派闘争の相互関係

言うまでもなく、党派闘争とは、ある階級・階層の利害の政治的代表者である政党間の闘争である。この政党間の闘争が不断に発生するのは、今日の社会が階級社会であり、利害を異にする諸階級－層への分裂が存在し、各々の対立する利害を代表する政党が分立しているからである。

といっても党派闘争の現象形態は一様ではない。ブルジョア政党・小ブル政党間の党派闘争は、一般に、議会をめぐる工作－種々の取り引き・かけ引き、多数派形成に収斂されるものとして展開される。彼らは、資本主義社会の維持、そのための直接的強制力としてのブルジョ

ア国家の存続というところでは、共通の基盤に立っているからである。

かかる基盤に、プロレタリアートとその政党は立ちえない。したがってプロレタリアートとブルジョアジーの党派闘争は、なによりも、国家権力そのものをめぐるものとして展開される。ブルジョアジーが〝国民全体の代表者〟という装いをもって登場しようとし、それに対しプロレタリアートは、人類の新たな歴史を切り開く前衛として登場するからである。

ところで、ブルジョアジーは、自己を支配階級へと組織しており、国家権力を掌握している。一方プロレタリアートは、この日本の現状においては、自己をブルジョアジーに非和解的に対立する単一の階級へと組織し、行動しえているわけではなく、単一の政党を創建する事業の前に足踏みしている。プロレタリアートの利害を代表しようとする部分は分裂しており、ブルジョア的小ブル的党派とその政治の影響の浸透を許してしまっている。

したがって、プロレタリアートの真の代表者の建設にむけた党派闘争が不可避のものとして存在している。

それは、ブルジョアジー・小ブルの党派性に屈服した部分の影響を一掃していくために、また、プロレタリアートのある部分々々の自然発生性のあれこれの表れに拝跪し、その囲い込みを特別の理論にまとめあげ立場化することで、分裂を止揚していく能力の獲得をサボタージュし、結果として分裂を固定化する傾向を打破していくために、是非とも必要である。

その際、スターリン以来のやり方（これは多くの党派のみならず、これに反発する無党派活動家層にも少なからず浸透してしまっている）、すなわち、対立する相手をレッテル貼りや概念操作等の表層的気分的な批判によって撫でぎるやり方と、きっぱりと手を切らなければならない。それは、労働者大衆の政治的判断能力を奪い、麻痺させることによって、自己の政治のもとに囲い込もうとするやり方に他ならない。

もとめられるのは、相手の路線を全面的にとらえ、その根本から批判し抜く活動であり、そのことを通して労働者大衆の政治的判断能力を向上させていくことである。

プロレタリアートのブルジョアジーに対する階級闘争を発展させること、文字通り階級対階級の闘いへと押し上げていくこと、このためには、同時に、プロレタリアートを単一の階級へと結集させることがもとめられるのであり、それは、単一党の創建に向けた革命的な党派闘争をやり抜いていくことを離れては、ありえないのである。

2. 階級闘争・党派闘争の暴力的展開について

階級闘争の展開が一般に暴力的形態をとって現出するのは、闘争する階級間の利害が非和解的なものとしてある、という現実に根ざしている。国家の存在も、この現実に基礎を置いている。すなわち、ブルジョア国家とは、ブルジョアジーの支配のための系統的な暴力機関であり、ブルジョアジーによる暴力の独占、プロレタリアートの武装の解除・抑圧の機関に他ならない。

プロレタリアートの闘いの終局目標は、自己を経済的に解放することであり、階級支配を、したがって階級そのものを廃絶することにある。それは、資本制生産様式を、より高度な生産様式にとってかえることによってのみ実現されるものであり、そのためには、〝収奪者の収奪〟—資本家からの収奪が不可欠である。

したがって、プロレタリアートの政治運動上の目標は、ブルジョアジーの国家をプロレタリアートの国家にとってかえること、ブルジョアジーの武装—さらに宣伝を含む種々の活動—を解体する、あるいは統制下においていくための、プロレタリアートの武装を発展させ、物理的強制力をもった統治能力を獲得していくこと、に置かれなければならない。

かかる性格を有するプロレタリアートの階級闘争—政治闘争が、不断に暴力的形態を取っていくのは、必然である。プロレタリアートは現実の展開に立ち遅れることなく、プロ独を組織すること、蜂起を権力奪取に向けた技術として取り扱う能力を獲得すること、こうした意識性に立って、階級闘争の暴力的発展を促進し、実際行動を通して、自己の武装を強化していかなければならない。

プロレタリアートは、ブルジョアジー及びその利害と結合する右翼結社等種々のグループに対し、物理的強制力を行使することに、ためらうことはできない。それは、自己の敗北に直結せざるをえない。また、小ブル—小商品生産者に対しては、彼らの武装解除を前提としながら、主として強制によってではなく、教育によって、共産主義社会の建設の担い手へと変革し、この事業に引き入れていくことが基本である。

一方、プロレタリアートは階級闘争を階級の廃絶に至るまで、勝利的に展開し抜いていくまで、自己の武装を解除することはできない。とりわけ、国際帝国主義を打倒するまでは、たとえ、一国的には権力を掌握したとしても、その条件を基礎に、武装を一層強化していくことが不可欠であり、国際主義的義務である。

今日、プロレタリアートの武装した闘いは、世界的現実となっており、この日本の地においても、小規模ながら恒常的なものとなってきている。ただしその際、プロレタリアートは単一の階級として登場しえているわけではない。したがって、プロレタリアートの真の代表の建設をめぐる党派闘争が存在しているのであり、階級闘争

の暴力的発展に照応して、この党派闘争も不断に暴力的形態をとったものとして現れてきている。

プロレタリアートが武装を組織していくためには、もちろん、技術だけではなく、なによりもその技術を綱領上・戦術上の原則と判断に基づいて行使していく政治的能力が要請されるわけであるが、その政治的能力は、分散した自然発生的な武装－武装闘争を、プロレタリアートの単一の団結の下での、結合された計画的なそれへと止揚していく質をもたなければならない。

しかし革命的左翼はこの任務に歴史的に逢着し、その前で立ち止まってしまっている。ここにおいて、武装をめぐる自然発生性への拝跪－政治的欠陥が、党派闘争にも貫徹することは不可避となる。

また、ブルジョアジー・小ブルジョアジーの党派性に屈服した部分の諸活動に対し、プロレタリアートの党は、思想上・運動上・組織上の全面にわたって批判し、闘争しなければならないが、この闘いが暴力的展開となるのは、実際的には、避けられないであろう。

〝内ゲバ反対〟一般を主張することは、この現実を直視しようとしない日和見主義にならざるをえない。

プロレタリアートがなさなければならないのは、〝内ゲバ反対〟一般を掲げることではなく、どのような党の綱領・戦術・組織の下で武装を促進していかなければならないかを、より鮮明に押し出していくことであり、プロ独一般の主張や、自然発生性への拝跪の理論的まとめ上げとしての戦略・戦術図式の枠から、武装をとらえようとする傾向－60年代末から70年代初頭のブントの経験の中で破産を宣告されたそれ－を批判し、その欠陥を暴露することである。

と同時に、自己を、単一党のイニシアチブとして打ち鍛え、政治的軍事的能力を高め上げていく任務に、直ちにつかせることであり、そのことを通して、党派闘争の暴力的展開という現実の只中で、単一党建設に向けた自己の活動の自由を力ずくで防衛し、この事業を断固やり抜いていくことである。

その際、敵対暴力は、これを実力で粉砕しなければならないし、そこにおいては、〝戦争の論理〟が貫徹することを忘れてはならない。

中核派の武装闘争について

一

70年代以降、軍事組織の建設－武装闘争への着手を、意識的に準備し実践してきた中核派は、現在、新左翼諸派の中において最大党派としての位置を形成している。

この中核派に対して、様々な批判が存在している。テロリズム・内ゲバ主義・セクト主義等々。これらの批判のほとんどが、より自然発生的な、より日和見主義的な側からのものに、いわゆる〝右から〟のものにとどまっている。つまり党独自の武装と武装闘争に対して、大衆運動・大衆武装それ自体を対置するという位置からの批判におちこんでしまっているのである。

これらの批判は、中核派が、武装闘争の権威をもって、学生運動・労働運動・住民運動等、種々の大衆運動を引き付け、組織している現実を見ようとせず、観念的に否定することによって成り立っている代物である。これでは、中核派の路線的欠陥への単なる反発とナデギリ（これは、自己のありようへの観念的肯定へと不断に結びついていく）に終始せざるをえない。

問われているのは、党独自の武装～大衆武装を貫くプロレタリアートの武装の中味、したがってプロレタリア独裁の内実であり、これを根本的に準備し組織していく党の路線－指導性である。

この問題に真正面から向き合おうとしない位置からの批判は、結局は、労働者大衆のあれこれの自然発生性を、恣意的に設定した〝革命のみちすじ〟にはめ込もうとする戦略・戦術主義の枠の中にとどまらざるをえない。すなわち、せいぜい、中核派とは違った形での自然発生性への拝跪の体系化にいきつかざるをえないのである。これでは自然発生性の急進的表れを代表しようとし、一定の〝成果〟をあげている中核派の路線の欠陥を根本的に切開し、止揚するものにはなりえない。むしろ、自己の日和見主義（－より日和見主義的な形での自然発生性への拝跪－）の正当化・固定化のための道具へと転化していくものとなるであろう。〝急進民主主義〟という批判も、

赫旗派にあっては、主観的意図は別にして、実際上はこうした脈絡に位置するものとなっている。

まがりなりにも、中核派は、60年代末から70年代初頭の闘いの地平を防衛し発展させるという任務に、彼らなりに応えようとしている。しかしそれは、当時、武装闘争の地平を切り開き、敗北した、ブント左派－革命戦争派の路線的欠陥を越えでるものとはなりえていない、と我々は判断している。

我々は何よりもこのブント左派の敗北－逢着問題への革命的な回答の地平、綱領・戦術・組織総体の転換の地平に立って、中核派の路線の、不徹底性・一面性・限界をとらえ、批判していかなければならない。この活動によってこそ、中核派の路線的欠陥への反発を、右翼的に固定化させるのでなく、より革命的な側から再編していくことが可能となるであろう。

Ⅱ

中核派は、軍事組織の建設－武装闘争への着手を、「先制的内戦戦略」をもって定式化している。

「先制的内戦戦略とは、深刻なる体制的危機におちいった帝国主義が、革命を予想し、革命を予防するために革命党にたいして、破防法型、組織絶滅型大弾圧をくわえる一方、武装した民間反革命を保護、育成し革命党にたいする職業的白色テロ攻撃、反革命戦争を使嗾(しそう)し、扇動し、革命と革命党を撲滅せんとして攻撃してくることにたいし、革命党がかかる民間武装反革命にたいする革命戦争＝内戦を開始し、蜂起にたちあがり、かかる民間武装反革命との革命戦争＝内戦における革命的勝利的進撃をもって、全階級闘争を内乱・内戦－蜂起、革命へとねりあげ、内乱期の戦争陣型を先どりしていくという、革命党の決定的に革命的で先制的な戦略をいうのである。」(野島三郎『現代革命と内戦』p274)

「三〇年代的＝七〇年代的世界危機の時代において、すでに革命の問題＝権力の問題が本質的に提起されるなかで、いっさいの問題が革命党の存在そのものをめぐる攻防として、帝国主義のみならず積極的民間反革命とのあいだでの内乱・内戦にしぼりあげられてくるのである。先制的内戦戦略とは、革命党が、この二重の反革命攻撃をうち破るべく、たとえそれが民間反革命とのあいだであろうと、すでに激烈に内戦形式をもってたたかわれているこの戦争を一個の内乱－内戦として位置づけかえし、階級闘争全体をそれにひきずりこむかたちで、本質的には敵階級に一歩先んじたかたちで内乱－内戦的陣形をつくるべく、この戦争を徹底的に先制的に推進していく革命党の戦略である。」(同前 p110)

「三〇年代的危機へのラセン的回帰の趨勢をつとにつかみ、敵階級に一歩先がけて、先制的に一定の形態のもとでの革命的内戦を組織していく先制的内戦戦略の大路線」(『前進』88年新年号 政治局アピール)

ここで彼らは、帝国主義の動向－階級間の相互関係の移行の将来への見通し(＝30年代のアナロジー)をもって、その枠から帝国主義ブルジョアジーの攻撃・政策の性格を分析することで、「内乱期の戦争陣型を先取りしていく」ものとして武装闘争を位置づけている。彼らの武装闘争は、帝国主義の動向(の主観的な予想)との関係で〝先制的〟という位置を与えられ、帝国主義の攻撃(政策)を打ち破っていくことをとおして内戦を切り開いていくものとして位置づけられているのである。

「先制的内戦戦略」とは、軍事組織の建設－武装闘争への着手という彼らの組織的判断と実践を、恣意的な戦略・戦術図式へと整理しまとめあげ、特別の意味付与を行った以上のものではない。

Ⅲ

かつて、二次ブント－赤軍派もまた、戦略・戦術図式をもって、武装闘争を、根拠づけ、実践し、敗北した。中核派はこの経験を少しも総括しえていない。そればかりか、国際主義と権力問題という点において、より狭い見地に立ってしまっている。次にこの点について見ていく。

赤軍派は武装闘争に着手するにあたって、「被支配階級としてのプロレタリアートは、過渡期世界突入を契機に世界武装プロレタリアートに成熟・到達」し、「ブルジョアジーは、この(二大階級の)闘争関係に於て、受動的防衛的であり、プロレタリアートは能動的攻撃的」(『赤軍』No.4)であるとすることで、「攻撃型階級闘争」「攻撃型革命」を主張し、前段階決戦・前段階蜂起－世界革命戦争という図式を描いて、その中に自己の武装闘争を位置づけた。

こうした主張が、きわめて主観的恣意的であることは言うまでもない。ただし、見落としてはならないのは、かかる図式で表現しようとした政治的態度の積極性・先進性である。それは、一つには、武装闘争・革命戦争の国際的展開という現実に接近し、国際的基盤の上に、党の活動を立たせようとする国際主義的態度である。さらには、政策反対政治から脱け出て、武装蜂起を現実的課題とし国家権力の構造そのものにせまる闘いを実践の課題として突き出したことである。

これらの点に、中核派は無自覚である。〝反帝反スタ〟を立場とする彼らは、アジア・アフリカ・中南米において反帝国主義の武装闘争・内戦を闘い抜いている共産主義者の党・グループに対して評価不能になっており、国

際階級闘争の現実に接近しえないでいる。また、80年代に入って「先制的内戦戦略の第二段階（日帝権力との戦争を第一の基軸とする）への前進」を主張し、さらにその「基軸」として「三里塚二期決戦」を押し出し、「三里塚二期決戦勝利－日帝打倒」という〝みちすじ〟を提起していることに端的に表れているように、彼らは今だ、政策反対政治にどっぷりつかっており、武装闘争もこの政策反対政治の枠に押し込められてしまっている。

中核派の武装闘争が、赤軍派－ブント左派の後退の中で一定の権威を生み出すと同時に、労働者大衆の中に少なからぬ反発をも生み出してしまっているのも、こうした政治的欠陥に根拠を有していることは間違いないであろう。

Ⅳ

以上見てきたように、中核派は、政策反対－急進主義の政治をもって、〝革命のみちすじ〟を設定することで、権力問題に接近しようとし、軍事問題に積極的位置を与えている。したがって、労働者大衆の種々の自然発生性への接近・結合の基準は、この〝革命のみちすじ〟となっており、この型に大衆の自然発生性をはめ込むことが、指導の中味となっているのである。

かかる路線によって、確かに彼らは、労働者・被抑圧大衆の自然発生性の表れの一部（急進主義的表れ）をとらえることにある程度成功している。だが、決して、自然発生性の全体をとらえ、労働者大衆を単一の階級へと結集させていくこと、またそのために前衛的部分・先進的部分を統合していくことはできないであろう。

なぜなら、プロレタリアートの階級闘争の戦術にもとめられているのは、大衆の自然発生性をある特定の革命の型にはめ込むことではなく、そうした自然発生性を根本で規定している資本主義・帝国主義の運動の全体をとらえ、これをより高度な生産様式にとってかえていく能力を労働者大衆に獲得させていくことだからである。

中核派の場合、彼らの資本主義批判・帝国主義批判の欠陥――すなわち、資本主義への批判を、「本来商品ではない労働力が商品となっている」という具合に資本主義の一つの側面を取り出し「労働者の疎外」であると告発することに切り縮めていく傾向、また、帝国主義への批判を、戦争と反動政策（独占資本の運動の生み出す諸結果）それ自体への批判・反発に収斂させていく傾向――にも規定されて、プロレタリアートの階級闘争の戦術を正しくとらえていないのである。

彼らの武装闘争は、このように狭い政治的土台の上に据えられてしまっている。このため、彼らの武装－軍事的能力は、一方で、彼らの路線でとらえきれない自然発生性や、それと結びついた諸運動に対する、暴力的統制・恫喝政治の手段ともなってしまっているのであり、彼らの武装闘争への積極的志向の限界の内に、反動性が刻印されているのである。

なお、88年新年号の政治局アピールにおいては、従来の〝三里塚闘争基軸論〟は後退している。これは、彼らの路線的混迷の表れであると同時に、混迷の一層の進行をもたらさずにはおかないであろう。また、武装闘争の前進は、不可避に権力－政治警察とのより鋭い攻防関係を創り出し、彼らの武装の内実を、より深くより厳しい検証にかけるであろう。

戦略・戦術図式との訣別、政策反対－急進主義の政治の根本的総括を抜きにしては、決して、この実践的な検証にたえることはできないし、路線的混迷を止揚することもできない。中核派は、客観的に、この問題に逢着しているのである。

我々は、真に革命的な党の建設をこそ支持し、その事業にこそ断固結びついていくのでなければならない。